

京大百年の風景



時計台 後方に比叡山



如意ヶ岳から京大・洛中をのぞむ

大文字の送り火で有名な如意ヶ岳からは、吉田山と京大、そして洛中が一望のもとに見渡せる。比叡山と如意ヶ岳の間から鴨川まで京大の構内を貫いて走り、かつては湖西と京を結ぶ主要な街道として栄えた白川道は、今でも人々の生活の場として健在である。それはあたかも京都に位置する京大が持つ歴史の重みを象徴しているように見える。

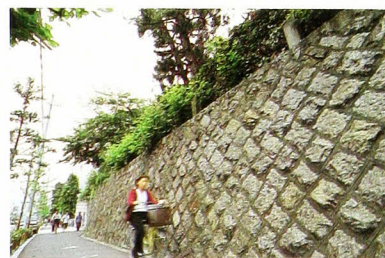
幕末における白川道(略図)





白川道に残る石仏

本部構内の北東側、今出川通を斜めに横切る形で残る白川道沿いは、現在は学生街らしい風景となったが、今に残る石仏に旧道の面影がとどめられている。



本部構内を取り巻く石垣

京大の本部構内は、幕末に設けられた尾張藩邸の跡地をほぼそのまま利用している。写真にある現在の東大路通沿いの石垣そのものは後年の建造ともいわれているが、境界線の形は藩邸当時のままであり、当時の様子を思い起こさせるようになっている。





旧物理学実験場(1889<明治22>年竣工)

本部正門を入って左側奥にある煉瓦造りの建物が旧物理学実験場である。第三高等学校の京都移転当時、理科系の教育施設として建てられた。京大創立後は何度か増築され、理学部物理学教室や工学部燃料化学教室などが使用した。前身校時代から使われている建物としては、京大で最も古く、創立期の大学の雰囲気や今に伝えている。



本部正門(1893<明治26>年竣工)

本部正門も旧第三高等学校時代に建てられたものである。京大が創立された後は、そのまま京大の正門として残され、時計台とともに大学の象徴として今も生きつづけている。

帝大から新制京大へ





楽友会館(1925<大正14>年竣工)

大学としての星霜を重ねるなかで、同窓会館建設の気運が高まり、創立25周年を記念して楽友会館が建設された。楽友会館は、各種の研究会や講演会などに盛んに利用され、京大アカデミズムの発信地となった。森田慶一設計のその姿は、大学の古き良き時代の記憶を現在までとどめている。



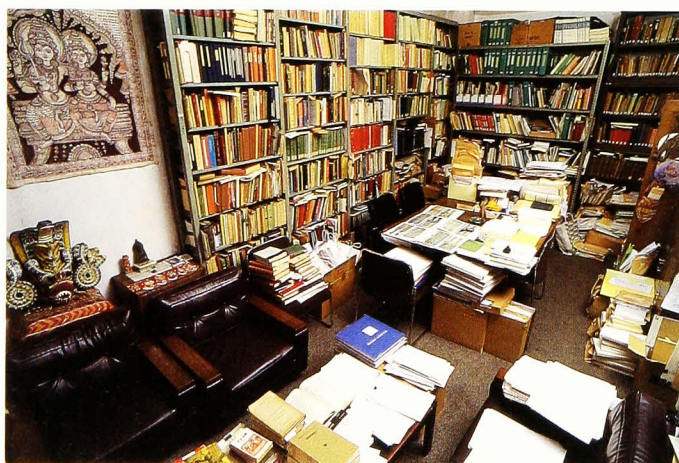
大学と戦争

1943(昭和18)年、太平洋戦争の戦局が深刻化してくると、それまで徴兵猶予されていた文科系を中心とした学生が戦場へ送られることになった。写真にある絵は、当時の文学部講師須田国太郎が描いた「学徒出陣図」であり、現在総長室にかけられている。

新制大学入学関係綴

敗戦がもたらしたものは、焼け野原と社会の大変革であった。帝国大学も、民主主義教育の理念のもと、新制大学として生まれ変わるようになった。この写真は、新制発足時の文学部の入学関係事務書類をまとめた綴りである。表紙の「新制」の文字が新しい大学の始まりを物語っている。なお、文学部の横に「教育学部」と書かれ、朱線がひかれているのは、設置当初の教育学部の事務が文学部事務室で行われていたからである。





人文科学研究所附属東洋学文献センターと
同研究所東一条本館内教官研究室

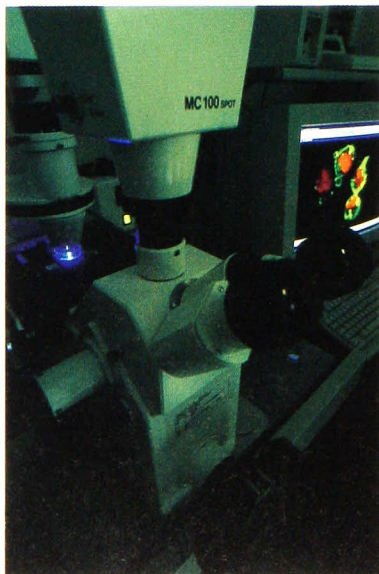
戦後、京大は湯川秀樹、福井謙一のノーベル賞受賞をはじめとして数々の学問業績を生み出してきたが、そのうち人文科学研究所は多くの個性的な人材によるすぐれた研究で世に知られた。それは、自由の学風といわれる京大の研究基盤に加え、ユニークな共同研究方式の成果であるともいえる。スパニッシュ・ミッション様式といわれる瀟洒な外観は、学問研究の場にふさわしい雰囲気を醸しだしている。



構内にあふれる建物と自転車・車

高度経済成長期を迎えると、京大でも学生数が大幅に増加し、建物もつぎつぎと建てられた。その結果、キャンパスの狭隘化が深刻な問題となっており、今後の大学のあり方に問題を提起している。

新時代の胎動



レーザー顕微鏡システム

科学技術の急速な発展は、すべての学問分野をまたいで広範な影響を及ぼしている。写真の顕微鏡システムは大学院医学研究科のものであるが、レーザー、コンピュータシステム等現代社会の最先端の技術がこの分野においても活用されている象徴である。

ベンチャービジネスラボラトリー(左)
および大学院人間・
環境学研究科棟(右)

社会の急激な変化、学問研究の高度化をうけて、京大も新しい時代へ動きはじめている。ベンチャービジネスラボラトリーは、将来の産業の基盤となる研究開発と創造的人材の育成を目的に掲げ、最初の独立研究科である大学院人間・環境学研究科は従来の学問分野の枠組みが再編されつつあることを示している。





東南アジア研究センターと鴨川の流れ

歴史の道「白川道」は荒神橋を終点として鴨川と交わっている。この近くには、第三高等学校の京都移転と同時期につくられた京都織物会社の建物を利用した京大の東南アジア研究センターがある。百年を経て大学も学問もその様相を変えたが、変わらぬ姿を見せて流れる鴨川は、京都という歴史と文化の都における大学の役割について今も静かに問いかけつづけている。

